



水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十号

2022/12/28 発行

題字：高橋弘美

ご挨拶

年末になるとなんとなく一年をふり返ってみたい気がするけれども、今年なにかあったかといえば特になにもなかったような、そうはいつでもずいぶんいろいろあったような、なんだか妙な気持ちがある。

こういう仕事をしたとかこういう資格を取ったとか、あるいは子どもが学校に入ったとか家を買ったとか、そういうわかりやすい出来事があればまだいいが、わたしの生活はどうもそういうものに欠ける。誰だか忘れたが、聖人の人生は小説にならないと云った人がいた。彼らのようにおのれの内面のみを重視して生きる人々というのは、どうしても現実のドラマに欠けるために、お話にしにくいということなのだろう。それと同じようなジレンマをわたしも感じるのだが、結局のところそれを小説という形で表現しているとは妙なものである。

『西遊記』の注釈によれば、仙人になるのにわざわざ遠くまで修行に行く必要はないという。ほんとにそうだとわたしも思う。現実の景色より、自分で作った景色のほうがはるかに意義深い。人はそうした自分の景色を作るために、結局のところ生きているのではないのか。

今号の内容

東方へ

後記に代えて

東方へ

最近自分の興味がどんどん東方に向かっているのである。ついこないだまで西欧からロシアあたりをうろついていた気がするのだが、このところどうもユーラシア大陸の真ん中とか東寄りのほうにばかり興味を持つようだ。

この頃はシルクロードに関する本ばかり読んでいる。ちよつとそのへんの小説を書こうとしているからだが、こんなことになるとは思ひもしなかった。自分は生涯西洋で終わるのではないかと昔思ったことがあり、東洋には死ぬまでたどり着けないような気がしていたのだが、わからないものだ。

西欧以外の国にはどうしても、西欧文化との対峙という問題がつきまとう。この問題に熱中するあまり西欧に行ったきり戻ってこない人というのにも相当数いると思うし、また反対に、なんとか世に根強く残る西欧中心主義を打破しようと、おのれの分野で奮闘している人もいるに違いない。

主にイエス・キリストという人を前半生の伴侶と

してきたので、我が頭はとかくキリスト教の中での考えがちだったが、当時から自分はカトリックやプロテスタントの人間ではないと漠然と感じていた。東方正教会というものの存在をほんとうの意味で知ったのはかなりのちになってからだが、知れば知るほどこの西欧化していない宗派の存在は際立って見え、西欧文化圏に生まれていない人間にとつてのひとつの解決策のようなものがそこから見えてくるのではないかと思ったりした。

このような心でもって信仰を選ぶというのは少々よこしまであるかもしれないが、宗教というのは結局、自分で自分教のようなものを作るためにあるのではないかと最近思うようになった。その中にどんな宗教のどんな要素を混ぜこんでもかまわないし、魔術をやろうが護摩を焚こうが、動物や像をあがめようがちよつともかまわない。結局、自分の心があちらこちらとさまよふのを止めることはできないのだから、どこでも好きなのところをほつき歩いて、好きにものを見たり聞いたりして自分なりのものを組み立ててればいいのだ。

考えてみたら、この一年ほとんど仏教関係の本しか読んでいない。どうしてこんなことになったのか少しもわからないが、このごろ思うのは、この世にはただ人間がいるのみであって、特別に仏教信者だとかキリスト教信者だとかがいるわけではないということだ。いまは行きがかり上そこにかかずらうて

いるにしても、未来永劫そうであるかは誰にもわからない。もし仏教からなにを学びましたかと訊かれたら、たぶん、非常に平凡な答え、あの云い古された、すべては移り変わってゆくことを学びましたと、わたしもまた答えるに違いない。

でもこのたいへん流動的な、現実的なもののとらえ方は、わたし自身の内部にほとんど革命に近いものを引き起こした。キリスト教的な思考の枠組みというか自意識のあり方は、なんとというか、あまりにも頑固すぎるようなところがある。ほとんど子どもっぽく見えるほど意固地で頑固なところがあって、むくれてそっくりかえった子どもが、母親がなだめてもすかしても頑として座りこんでてこでも動かさないみたいなどころがある。

これはひとえに神さまという人がそういう御仁として描かれているせいもあるだろうけれども、逆に云えばこんなところからでなければコギト・エルゴ・スムなる一文などとても出てこないわけだ。そしてこの頑固親父的なコギトというやつは、ずいぶん苦しいに違いないのである。というのも、頑固親父というものがどの世界においてもそうであるように、こいつは日々自分の身近に起こるありとあらゆる現象と衝突し対立し、傷だらけになり、優しい奥方が、「ねえあなた、もういいじゃないの。そんな肩肘張って意地を張って、おれがおれがとやらなくなつて。

あなたが世界を回しているんじゃないのよ。もう少し肩の力を抜いて、流れに任せてみたら？」

とせっかくなるわしい助言をしてくれているのに、「うんにゃ」と云ってそのやわらかい腕をはねのけ、これはおれの意志だぞ、これはおれの願望だぞ、これはおれの感情だぞ、これはおれの話だぞ、と日々自分自身というものを研ぎ澄ませてゆき、そうすればするほどおのれなるものが頑丈に頑固になって、おのれとおのれ以外というものの対立は鮮明になってゆくのだ。

コギトは孤独な輩だ。川辺にひとり座りこんで、自分というものがまったくひとりぼっちで、どうして毎日こんなにいろんなものと衝突して、苦しうまくいかないのか考える。そしていろんな理由をひねくり出すが、彼がこうに違いないと頑固に断定するものが、腹をくだした理由や寝坊した理由からいならまだいい。ところがこの頑固親父は孤独な思索にふけりがちなものだから、つい隣家の亭主とそりが合わない理由とか、妹の子どもが障害児に生まれた理由とか、母親が平均寿命まで生きなかつた理由のようなまで考えてしまう。

こんなことを続けていると、いつか彼の現実には本人の思惑と裏腹に、どんどん理性を離れて情緒と魔術的因果関係の世界へ入りこんでいってしまうに違いない。孤独なコギトの駆使する理性的思考能力なるものが、実は情緒そのものであり、ものごとに対

して自分が感情的に納得するためのものであり、それは結局どこまでもいにしへの魔術の延長であることを、この親父が気づいたならば幸いなことである。

ごく普通の人間には、しょせんその程度の因果関係……妹の子どもが障害児になつたのはあの子が妊娠中にあんまり働き過ぎたせいだ。あいつの亭主は確かに悪いやつじゃない、だが少々だらしが無いし、仕事に対する姿勢も真面目とは云えない。あんな生き方で妻子を守れるもんか。あんな締まりのないやつだから、子どもだつてあんなことになるのさ……

しか導き出すことができないのだが、孤独なコギトはたいていそれを理性的判断に基づいたものと思ひこんでいる。彼はおのれが神のごとく完全な、伶俐な思考に導かれていると信じているが、その内情はただひらめきと思いつきと感情の世界なのだ。

こんな人間がその判断力を突きつめてゆくかどうか、書くまでもない。狂人は狂っているのではなくて、理路整然としすぎているのだ。

たいていの人が云うのと違って、わたしがキリスト教から教わつたことは、情緒的關係以外のなにもでもない。神さまがすべてをお創りになつたこの世界においては、あらゆる出来事は神さまの意志や意図のあらわれであつて、わたしはそれを正しく読み解くことに全身全霊を捧げたものである。だが悲しいことにわたしという人間の精神が古代人か

ら少しも進歩していないものだから、それは結局古代の魔術的思考以上のなにかを導き出すことはできなかった。わたしの頭はというと、今日包丁で指を切つたのはわたしが赤い服を着ていたせいでなければ神からの警告に違ひなく、自分がなにか間違つたことをしたからに違ひないとか、電車が遅延したのには神がわたしを戒めるためであるに違ひないとか考へる程度の頭しか、しょせんは持ちあわせていなかったのである。

そしてこの世界は、こうした判断がほんとうに正しいかどうか客観的に判断してくれる存在に欠けていた。神父がそうだと人は云うかもしれないが、わたしは自分と神との關係について人に相談するくらいなら舌を噛んだほうがましだと思つていた。それは強烈な、強固ななにかであつた。わたしと彼との紐帯はほとんど愛憎關係のようであり、わたしはたいていの時間、ほとんど神に挑みかからんばかりの顔をしていた。そのくせ彼がわたしになにか温情のよなものを示すと、正確にはその兆しが見えるよな出来事が起こると、わたしはあつけなくわが憎しみを解いてしまつて、感謝のあまり泣き崩れるのである。

わたしはほんとうに、すべてに神の存在を感じていた。その生々しい意志のあらわれを感じていた。その波動を感じていた。その呼吸を感じていた。どんなときにも。

子どものころ、わたしはぬいぐるみや漫画の人物が、みんな意識をもっていて、意図して自分を見つめていると信じていた。彼らに見つめられると、自分の頭の中がみんな彼らにばれてしまうのだとも信じていた。夜にはその力が特に強くなるので、頭の中をのぞかれるのを防ぐためにわたしは必死であった。箱の中にそれらを隠し、ドアを閉め、なるたけ自分から遠くへ押しやることで、それらの力は失われる。扉二枚か三枚隔てれば、もう大丈夫である。あらゆる人型をしたものから逃れ、その読心能力から逃れてはじめて、わたしは心安らかに眠りにつくことができた。

世の理性的な人々、健全に現代人にまで発達を遂げた人々には、こんな発想は生じないに違いないし、そういう人たちがキリスト教を駆使すれば、この宗教はきわめて有益であるに違いない。ところがわたしのように、そのはじまりからしてすでにつまずいているような人間においては、善悪を判断する、意志をもった神という考えは、いたずらに自分を脅迫し苦しめるばかりなのだ。

いまでは、わたしは単にその運用方法というか理解の方向を根本的に間違えていただけだということがなんとなく理解できるが、お釈迦様という方がわたしの人生にあらわれなかったら、こうしたことは

おそらく生涯わからなかったに違いない。

お釈迦様は理知そのもののような方である。この方の説く世の法則、大宇宙の摂理には、感情的なところなど少しもない。宇宙はわれわれ人間の感情にのっとって運営などされていない。確かにわれわれの感情は摂理の一部であって、それ自体の法則をもっているが、その法則に情緒的なところなど少しもない。善悪の判断もなければ意図もない。そのような人格的な存在などどこにもないのだから、当然のことである。

同じように、自分に降りかかる出来事は因果的法則に従ってわたしの前に展開されるのだが、そこになんらかの意図や誰かの意志がこめられているわけではない。わたしを罰する者もなければわたしを褒め称える者もない。摂理そのものは、どんな色合いも帯びていない。色合いを求め、色をつけてゆくのはわたしなのである。それがわたしの性質であり、逃れがたいわたしなるものの刻印である。

この刻印の動きを見つめることを、わたしはお釈迦様に教わった。それがどれほど悲しく愚かなものであるか、わたしはすでに知りすぎるほど知っていた。お釈迦様はこうおっしゃった。

「おまえは世界を理性的に見定めているのだと思っているでしょうが、実際におまえが探しているのは感情的な落とし所ですよ。そのことがわかっていまずか。ところで摂理とは、感情的なものでしょうか。」

感情的なものは、摂理そのものというより、多少別の次元にあるのだと考えることはできませんか。そうすると、世界というのはどうなりますか」

お釈迦様は、あんまりわたしの迷いが深いものだから、あわれんでこう声をかけてくださったのに違いない。そしてそのときわたしは、お釈迦様が慈悲深い方だということと、神が慈悲深いということとは、見た目の相似に反して実におそろしいほど異なったものであることを、はっきりと感じたのだ。

お釈迦様はあくまで精進努力した、ひとりの人間である。その方がわたしのバカさ加減をお笑いになり、これこれと声をかけてくれるのと、全知全能の神が無知無能な人間をあわれんで、愛してくれたりするのとは、もうまるきり全然なにもかも異なっている。お釈迦様があわれんでくれるのは、わたしには心強いことである。なんといつても、この方はわたしの先輩なのだ。きっと生まれつき優れた資質を備えた方であったには違いない、しかしわれわれ以上に特別な才を持っていたかどうか、そんなふうの人に思われることを望むかどうか、わたしはちょっと疑問を抱く。

この人はあくまで自分の足で一歩ずつ歩き、自分の力でもって摂理に挑んだに違いない。そしてその結果を天才だとか才能だとか云われて片づけられた

としたら、この人はちょっと悲しくなるに違いないのである。

でも神様相手だところはいかない。いやあの世界にもイエスという人がいるではないかと人は云うに違いない。でもあの人だって結局は神様なんだから。

神様が人を罰したり裁いたり褒め称えたりすることは、われわれはどのように判断される存在だということだ。われわれより偉大なものが、なにか思惑のようなものをもっていて、われわれを判断するとなったら、われわれもう落ち着いてなんかいられないはずである。

そういう世界は、ときどきお釈迦様のような人が出て、摂理というのはこう働いているですよと云ってくれたり、よい仲間たちと愉快に過ごすのは愉快だねと云ってくれるような世界とは全然違っていい。お釈迦様の世界では、人はあくまで単に人という、宇宙の一部である。どっちに転んだって人だから、人ってしょうがないね、でもそのしょうがないさをなるとかどうにかしたいねとか云って笑っていられる。でも神さまの世界では、神さま自身が人間をこさえたくせに、人間というやつは反抗的で愚かで、鞭でぶっ叩いて強制しないとどうしようもないやつだと思われている。悪いことはみんな神さまの愛の鞭で、いいことはみんな神さまの愛だとしたら、世の中って、いったいなんだろう。

ほとんど四十年を費やしてわかったことは、わたしのよう人間が神に向かうと危険だということである。単に危険なだけならまだいいが、わたしのよくなのが神にまともに向かってゆくと、太陽に向かつていったイカロスみたいに焼け焦げて墜落する羽目になる。神の世界を歩くには、わたしの理性はあまりに幼くおぼつかなくてあぶなっかしい。

でもお釈迦様の世界では、わたしは自分の理性でなく摂理というものを信頼してられるような気がするのだ。それはわたしのように感情に振りまわされたり誤った判断に基づいてつつ走ったりはしない。神さまだってそういう御仁のほうであるが、わたしはその万能の神さまの示すサインを正しく読み解く能力が、結局のところなかったのである。

とはいえ神さまとの関係には、すばらしいものもたくさんある。それを捨て去る気は別にないのだ。ただ、お釈迦様がわたしをあわれんで教えてくださったことは、わたしの目を塞いでいた白い膜のようなものを一枚そっと剥がしてくれた。わたしは新しいまなこでこの世というものを見つめ、ここがいつたいどんなところだったか、少しも知らなかったことに驚いているところなのだ。わたしはわたし自身のことでも神のことでもこの世の法則のことも、少しも知らないでいままで生きていたのである。

それじゃあこの先わかるのかといったらおそろくわかりはしないのだが、わたしにわからないでもお

釈迦様にはわかってるし、神さまもご存じである。わたしの後ろで、このふたりは案外互いを肘でつつきあって笑っているかもしれないのだ。そうならわたしも満足だ。そうであればこそわたしは心穏やかでいられる。明日の天気が猛吹雪だろうと晴れだろうと、心の底では笑っていられる。

後記に代えて

今年わたしにわかったことは、結局このようなことだ。こんなことがわかったところで、いったい誰にどう伝えたいのか、それはいったいなんの足しになるのか、わたしには相変わらず少しもわからない。ただわたし自身が年々豊かになってゆくか、あるいはそう錯覚してますます迷妄に陥っているかだ。

が、結局どっちだって別にかまわない。わたしが死んだあとで、悪魔が舌を出しながらやってきて、「お生憎さま、実は神さまなんて御仁はおれの作り出した幻さ」

と云ったところで、生きてるあいだに神さまから得られた豊かさが減るわけでは少しもないと昔思ったものである。ほんとうに誰かを、あるいはなにかを信じるなら、裏切られることまで含まれていな

ければうそである。ユダの話はそういうことを教えているのに違いない。ほんとうに神さまを信じているとすれば、あるいはお釈迦様を尊敬しているのだとすれば、そんな人はいなかったとか、実は飲んだくれのくだらない男だったとかいうことがわかったところで、少しも問題にならないはずである。

二〇二二年はそんなところで終わりそうだが、二〇二三年には、現在のウェブサイトを自分でHTMLタグを打って作ったものに変更するかもしれない。最近ワードプレスに息苦しさや不信感を感じられないということ、自作のウェブサイトというのがやっぱり好きだからだ。

一九九〇年代の後半、あるいは二〇〇〇年代の前半、眠れぬ夜になにかについて検索すると、どこの誰もしれぬ個人が、すさまじい熱意とエネルギーとでそのなにかについて語ったりしていた。あのころのインターネットには個人があった。洗練された見やすいデザインなどない代わりに、ページの隅々にまでその人の個性というものがあつた。

ああいう時代のインターネットを知る人間のひとりとして、そしてそれになにがなし救われてきたひとりの人間として、巨大なシステムと化してしまつたインターネットの世界から、もっとほんとうの意味で飛び降りてしまう必要性をいま感じている。あの世界にもっと人間の創造性をとり戻す義務がある

ように感じている。ワードプレスの気楽な、洗練されたシステムから降りて、もっとウェブサイト運営そのものにまつわる手間暇をとりもどすこと。無駄と手間と暇とを自分の生活にもっととり戻す必要を、最近つくづく感じている。

二〇二三年は、おそらくそんな年になる。それは世間からの乖離なのか、それとももっと別のなにかなのか。わからないけれども、そういうやつがたまにはいないと、世の中面白くないに決まっている。

二〇二二年十二月二十八日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



Émile Prisse d'Avennes : Hunter returning